

結婚コミットメントからみた中高年期の夫婦関係

伊藤 裕子*・相良 順子**

Characteristics of marital relationships in middle and old aged couples were investigated by categorizing them on the basis of three factors of marital commitments. Men and women (N=1,381) living with their spouses answered questions regarding their marital commitment, marital satisfaction, the concept of gender roles, and mental health. Participants were categorized into the following types based on the three factors of marital commitment: affectionate, normative, alienated, and average. Results indicated that the degree of marital satisfaction and mental health were high in the affectionate and normative types. Personal commitment in these two types was also high, in the affectionate type, it was based on intimacy between husband and wife on an equal footing, whereas in the normative type, it was based on functionality related to gender roles. It was indicated that sources of marital satisfaction were different even when middle and old aged Japanese couples perceived marital life positively.

Key words: marital commitment, cluster analysis, marital relationship, middle and old aged couples

問題と目的

結婚生活の継続をとらえる指標としてコミットメント (commitment) があり、結婚生活の継続を説明する主要な概念として位置づけられる。宇都宮 (1999) によると、コミットメントには2つのレベルがあり、1つはシステムの安定で結婚の機能性に関わるものであり、他の1つは親密性に基づくものであるという。親密な関係を扱ったコミットメント・モデルによると、結婚におけるコミットメントはいくつかの次元 (領域) から構成されていると考えられる (古村・松井, 2013)。Johnson, Caughlin, & Huston (1999) では、関係に留まりたいと思う「個人的コミットメント」、関係を続けることを道徳的に義務と考える「道徳的

コミットメント」、関係に留まることの拘束感ともいえる「構造的コミットメント」の3領域から成るとされる。また、Adams & Jones (1997) でも、「配偶者へのコミットメント」、「結婚へのコミットメント」、「罨にかかった気分」(関係を解消しにくくさせている外的要因の主観的評価) の3因子が報告されている。

わが国では、心理学研究のなかで夫婦関係が論じられ始めて歴史が浅い (柏木・平山, 2003)。最初に結婚生活をコミットメントの面から取り上げた宇都宮 (2005) では、中高年期夫婦 51 組を対象に、配偶者への愛情や信頼から成る「人格的コミットメント」、結婚の機能と離婚に関する「機能的コミットメント」、結婚に対する諦めを含む「非自発的コミットメント」の3因子が抽出された。その後、伊藤・相良 (2015) も中高年期夫婦

* 人間学部心理学科
** 聖徳大学児童学部

約 900 名を対象に、「人格的コミットメント」、「諦め・機能的コミットメント」、「規範的コミットメント」の 3 因子を抽出し、中高年期夫婦の結婚コミットメントを測定する尺度を作成した。なかでも「規範的コミットメント」は、結婚を道徳や信義に基づくものと考え、同時に社会的規範を維持しようとするもので、海外の研究で上がってくる道徳的あるいは規範的側面が抽出された。これらから結婚におけるコミットメントには少なくとも 3 つの次元が考えられる。1 つは親密性に基づくもので配偶者個人に向けられたもの、2 つ目は結婚の機能性に関わるもの、そして 3 つ目は道徳あるいは信義や契約といった観点からのものである。

ところで結婚生活の継続にはどのような結婚の質が関わっているのだろうか。結婚に恋愛感情はつきものであるというのは歴史的にみれば比較的新しく（落合，1997），親密性は結婚生活の絶対条件ではない。わが国の場合，結婚・夫婦関係満足度は，子育て期以降一貫して夫に比べて妻が低く（e.g. 稲葉，2004；伊藤，2015；伊藤・池田・相良，2014），なかでも満足度の低い妻は夫を機能的な存在として位置づけていた（池田・伊藤・相良，2005；岡本・村田，2005）。すなわち配偶者の存在を親密性と機能性に切り離すことで結婚生活を維持していると考えられる。

一方，夫婦関係満足度には，男女がどのような役割を果たすべきかというジェンダーに対する考え方や男女の公平性・対等性の認知が関係する（Saginak & Saginak，2005）。そして性役割観や性差観によって精神的健康は影響を受け，特に妻の就業形態によって夫の精神的健康への影響の受け方は異なってくる（Sagara, Ito, & Ikeda, 2006）。

近年では平均寿命の延びが著しく，長寿命化によって夫婦二人で過ごす期間が長期化し，三世帯同居世帯が減少して，高齢期では夫婦二人の世帯が増加している（厚生労働省，2016）。結婚した夫婦がどのように結婚生活を送り，何に重きを置いて結婚生活を継続しているか，長く結婚生活を送ってきた高齢期の夫婦では結婚当初とは異なった意味づけが行われると考えられる。恋愛関係・夫婦関係の研究では，今日，親密性が主要なテーマとして取り上げられるが，親密性，すなわち配

偶者に向けられた個人的あるいは人格的コミットメントが結婚の質を確保する第一義的要素といえるかどうかは疑問である。

わが国の中高年期夫婦を対象者として結婚コミットメントを明らかにした伊藤・相良（2015）では，人格的コミットメントは夫婦の愛情と高い関連がみられ，しかも他のコミットメントとは比較的独立だった。また，女性で高い諦め・機能的コミットメントは，男女とも低勢力認知と結びつき，自分が我慢をしているという意識が強かった。さらに，規範的コミットメントは伝統的な性役割観と関連が高く，しかも世代差が大きかった。これらの結果から，わが国における中高年期夫婦の結婚生活の継続の一端が明らかになったが，対象者の多くは中年期であること，また，どのようなコミットメントがどんな特性と結びついているのかを明らかにしたものであった。

そこで本研究では，中高年期夫婦の結婚コミットメントを明らかにすべく，上記に加えて特に高齢期の対象者を増やし，また，何に重きを置いて結婚生活を継続しているのか，結婚コミットメントにより個人を類型化し，その型によって夫婦関係満足度や愛情など結婚の質，さらに精神的健康にどのような違いがみられるかを明らかにすることを目的とした。

方 法

調査対象と方法

調査対象は中高年期の夫婦で，調査方法は，大学生の親，大学および自治体主催の公開講座・生涯学習講座受講者，公民館での各種サークル参加者，シルバー人材センター登録者，自治会の役員等に調査票（夫婦票）を配布した（約 1,700 組）。大学生の親は，おもに学生を通じて配布・回収した。大学生の親以外では，配布は直接，回収は全て郵送による。夫婦間の回答の独立を保つため，妻票・夫票を別々の封筒に入れ，調査用紙の色を違い，回答後すぐ封のできるシール付き封筒に切手を貼り，2 通 1 組として配布した。なお，配偶者がいない場合は，本人のみの回答でよいことを記した。有効回答は，女性 886 名，男性 692 名，

計 1,578 名であった。調査の時期は、大学生の親は 2013 年 6 月、その他は同年 10～11 月および 2014 年 10～11 月であった¹⁾。

倫理的配慮として、調査への協力は任意であり、回答したくない項目には回答しなくてよいこと、全ての回答は統計的に処理されるので、個人の回答が特定されることはないことを依頼状に明記し、可能な場合は口頭でも説明した。

対象者の属性

対象者のおもな属性は以下の通りである。年齢は 40～70 代で 95.7% を占め、各年代とも 350～400 名である。平均年齢は女性 59.9 歳 ($SD=11.8$)、男性 62.1 歳 ($SD=11.7$)、平均結婚年数は女性 31.9 年 ($SD=11.8$)、男性 32.4 年 ($SD=12.3$) であった。配偶関係は、有配偶で同居が 88.5%、別居 2.0%、無配偶で死別 5.3%、離別 2.8%、独身 1.3% であった²⁾。学歴は、男性で最も多いのは大卒で 49.9%、次いで高卒の 33.7%、女性で最も多いのは高卒で 45.3%、次いで短大卒の 36.1% であった³⁾。就業形態は、男性では常用雇用 35.1% と無職 34.3% が同程度で、経営者・役員が 12.8% であった。女性で最も多いのは無職 49.8%、次いでパート・アルバイトの 27.3%、常用雇用は 10.2% であった。家計収入は、400～800 万円未満が 40.1% と最も多く、400 万円未満が 28.0%、800 万円超が 24.8% であった。なお、本研究の分析対象者は有配偶者 1,381 名 (女性 727 名、男性 654 名) のみとした。

分析の測度

結婚コミットメント 結婚生活の継続をとらえる指標として、伊藤・相良 (2015) により作成された結婚コミットメント尺度 23 項目を用いた。評定は「5: とても当てはまる」から「1: 全く当てはまらない」の 5 件法で、3 つの下位尺度 (人格的コミットメント、諦め・機能的コミットメント、規範的コミットメント) から構成されており、 α 係数は .84～.92 で、妥当性も確保されている。

夫婦の愛情 伊藤・相良 (2012) により作成された 16 項目からなる夫婦の愛情次元尺度を用いた (例: 配偶者は私を理解してくれる)。評定

は「4: いつもそうだ」から「1: いつもそうではない」の 4 件法で、高い信頼性 ($\alpha=.94$) と妥当性が確保されている。

夫婦関係満足度 結婚・夫婦関係に対する総合的な評価として、単一指標による夫婦関係満足度を尋ねた (ご夫婦の関係について、現在の満足度を 10 点満点で評価して下さい)。回答は「10: たいへん満足している」から「1: 全く満足していない」の間の当てはまる数字に○をつけるものである。評定を 10 段階としたのは、単一指標のため測定の精度を高めるためである。

低勢力認知 相良・伊藤 (2010) により作成された低勢力認知尺度を用いた。これは意見が対立した場合や都合の優先順位、決定権において夫婦のどちらが優勢かを問うものである (例: 何か用事をしていても配偶者は自分の都合を優先するように言う)。項目内容に同意する程度を低勢力認知とした。6 項目から成り、評定は「4: いつもそうだ」から「1: いつもそうではない」の 4 件法で、 α 係数は .83 と十分な値であった。

役割割観 男女の役割について尋ねた 4 項目からなり (例: 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである)、 α 係数は .76 で (伊藤・相良, 2015)、評定は「4: そう思う」から「1: そう思わない」の 4 件法であった。

主観的幸福感 精神的健康の測度として、伊藤・相良・池田・川浦 (2003) が作成した主観的幸福感尺度 12 項目を使用した。この尺度は高い信頼性 ($\alpha=.86$) と妥当性が確保されており、項目数も少なく、単一次元で結果を表すことができる。評定は「4: 非常に○○である」から「1: 全く○○でない」の 4 件法で、回答の選択肢は質問ごとに異なる。

結 果

結婚コミットメントの基礎統計量と男女による差異の検討

結婚コミットメントの 3 つの下位尺度について、男女別に尺度得点を算出した。得点は、各尺度に含まれる項目の単純加算値を項目数で除した値を用いた。

Table 1 結婚コミットメントの平均値とSD および t 検定結果

	男性	女性	t 値
人格的コミットメント	3.99 (0.74)	3.75 (0.91)	5.32***
諦め・機能的コミットメント	2.79 (0.82)	3.07 (0.86)	6.24***
規範的コミットメント	3.19 (0.84)	2.90 (0.86)	6.53***

*** $p < .001$

結果は、Table 1 に示す通りである。人格的コミットメント、規範的コミットメントは男性が女性より高く、諦め・機能的コミットメントは女性が男性より高かった。

結婚コミットメントのクラスター分析

結婚生活を継続するにあたって個人が何に重きを置いているか、結婚コミットメントの下位尺度を用いてクラスター分析をした。Table 1 にみたように、どのコミットメントも男女で平均値が有意に異なるため、男女別に得点を標準化してクラスター分析（Ward 法）を行い、男女それぞれ 4 クラスターを抽出した（Figure 1）。

第 1 クラスターは、男女とも、どのコミットメントとも高いが、特に他のクラスターと異なり規範的コミットメントが高いので規範型とした（男性 $n = 161$, 女性 $n = 78$ ）。第 2 クラスターは、諦め・機能的コミットメントが低く、規範的コミットメ

ントも低いので愛情型とした（男性 $n = 120$, 女性 $n = 221$ ）。第 3 クラスターは、人格的コミットメントが最も低いので疎遠型とした（男性 $n = 99$, 女性 $n = 150$ ）。最後に、最も人数の多かった第 4 クラスターは、いずれのコミットメントとも平均値に近く平均型とした（男性 $n = 274$, 女性 $n = 278$ ）。

次に、抽出された 4 つの型間に各コミットメントで差がみられるかを確認した。男女別に各コミットメントを従属変数とする 1 要因の分散分析を行った。下位検定は Tukey 法によった。男性では、人格的コミットメント ($F(3,650) = 334.49, p < .001$)、諦め・機能的コミットメント ($F(3,650) = 319.03, p < .001$)、規範的コミットメント ($F(3,650) = 252.42, p < .001$) のいずれも有意で、下位検定の結果、規範的コミットメントにおける愛情型と疎遠型間を除くすべての型間で有意であり、人格的コミットメントの規範型と愛情型 ($p < .05$)、諦め・機能的コミットメントの疎遠型と平均型 ($p < .01$) 以外はすべて $p < .001$ で有意であった。女性も同様に、人格的コミットメント ($F(3,723) = 418.56, p < .001$)、諦め・機能的コミットメント ($F(3,723) = 387.59, p < .001$)、規範的コミットメント ($F(3,723) = 338.93, p < .001$) のいずれも有意で、下位検定の結果、規範的コミットメントの愛情型と疎遠型間を除くすべての型間で $p < .001$ で有意であった。

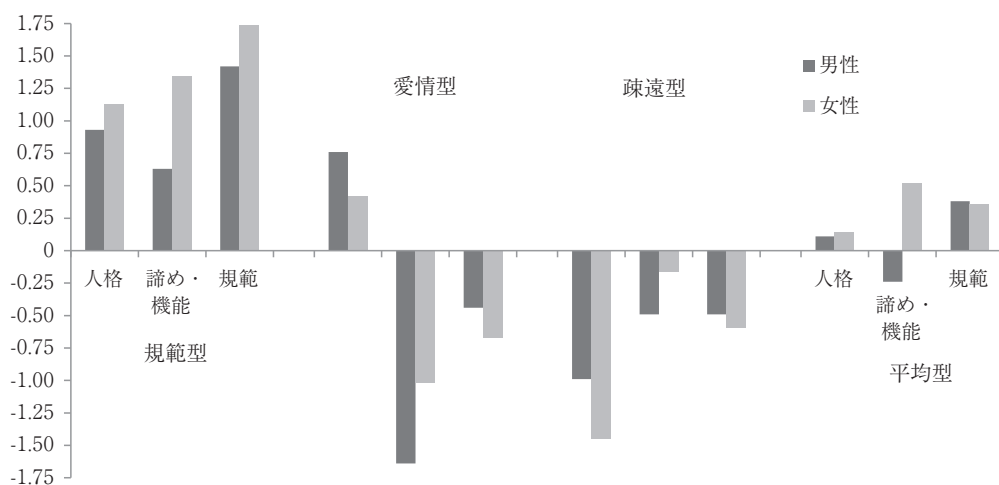


Figure 1 結婚コミットメントによる 4 タイプ

Table 2 結婚コミットメントによる各クラスターの特徴

		模範型	愛情型	疎遠型	平均型	F 値
年齢	男性	66.02 (11.70)	57.67 (11.23)	60.81 (10.67)	61.50 (11.31)	13.08***
	女性	65.99 (12.03)	57.06 (11.23)	57.09 (11.63)	59.52 (11.09)	13.38***
愛情	男性	3.43 (0.46)	3.42 (0.46)	2.42 (0.60)	2.96 (0.38)	124.10***
	女性	3.48 (0.40)	3.15 (0.50)	2.03 (0.58)	2.85 (0.53)	180.23***
関係満足度	男性	8.65 (1.46)	8.85 (1.35)	6.09 (2.40)	7.69 (1.67)	59.82***
	女性	8.26 (1.96)	7.57 (1.93)	4.54 (2.37)	6.73 (2.11)	79.67***
低勢力認知	男性	2.29 (0.65)	1.86 (0.56)	2.53 (0.61)	2.28 (0.54)	25.50***
	女性	2.19 (0.75)	1.96 (0.58)	2.65 (0.75)	2.34 (0.58)	36.54***
性役割観	男性	3.11 (0.71)	2.79 (0.75)	2.78 (0.68)	2.88 (0.60)	7.80***
	女性	3.17 (0.67)	2.54 (0.70)	2.60 (0.68)	2.79 (0.60)	20.37***
主観的幸福感	男性	3.06 (0.33)	3.13 (0.41)	2.82 (0.43)	2.91 (0.32)	18.53***
	女性	3.08 (0.32)	3.01 (0.32)	2.71 (0.41)	2.86 (0.33)	30.79***

*** $p < .001$

結婚コミットメントによる各クラスターの特徴

各クラスターの特徴を明らかにするために、Table 2 に示す変数を従属変数とした 1 要因の分散分析を男女別に行った。得点は、年齢、関係満足度を除くすべての尺度とも、尺度の単純加算値を項目数で除した値を用いた。その結果、すべての変数に $p < .001$ で主効果がみられた (Table 2)。下位検定は Tukey 法による。なお、群間の差の検討は平均型を除く 3 型を中心に述べる。

年齢では、規範型が男女とも年齢が最も高く、愛情型が最も低かったが、愛情型と疎遠型で有意な差はみられなかった。愛情では型間の差が最も著しく、男女とも疎遠型が規範型・愛情型に比べて著しく低く ($p < .001$)、特に女性でその違いが顕著で、すべての型間で $p < .001$ で有意であった。なお、男性では、規範型と愛情型間に差はみられなかった。関係満足度も同様で、男女とも疎遠型が規範型・愛情型に比べて著しく低く ($p < .001$)、やはり女性でその違いが顕著であったが、男女とも規範型と愛情型間に差はみられなかった。主観的幸福感では、規範型・愛情型が高く、かつ両者に差はみられず、疎遠型が低い ($p < .001$) ことに変わりはないが、これまでみられた差よりも小さくなっている。一方、低勢力認知ではこれまでと様相を異にする。男女とも疎遠型が高いのは当然だが ($p < .001$)、ただし男性の疎遠型と規範型間では $p < .01$)、規範型は愛情型に比べ、

自らを低勢力と認知していた (男性 $p < .001$ 、女性 $p < .05$)。性役割観では、規範型が男女とも最も高く ($p < .001$)、愛情型が伝統的な男女の性別分業に否定的であったが、疎遠型との間に差はみられなかった。

これらの結果より、値に差はあるがいずれの型とも男女でよく似た特徴をもつ。第一に、年齢を除くいずれの変数も男性より女性で各型間の違いが大きく、特に愛情と関係満足度で型間の差が大きかった。第二に、疎遠型はその特徴が明確だが、規範型と愛情型に共通するのは関係満足度や愛情の高さ、主観的幸福感の高さであった。一方、両型で異なるのは、低勢力認知、性役割観、年齢で、愛情型が規範型より低いことであった。

考 察

結婚生活を長く送ってきた中高年期夫婦の結婚継続の理由として、人格的コミットメント、諦め・機能的コミットメント、規範的コミットメントがあり、そのどれに重きを置くかで男女とも共通の型が抽出され、規範型、愛情型、疎遠型、平均型と名付けられた。

しかし、各コミットメントにはもともと大きなジェンダー差があり、自分を受容し理解してくれ、自分を最も信頼してくれる人として配偶者を位置づける人格的コミットメントは男性で高く、また、

結婚（離婚）を道徳的な観点からとらえ、相手に責任を持ち、社会的・道徳的な観点から結婚・離婚を考える規範的コミットメントも男性が高かった。それに対して、結婚を機能的な観点からとらえ、「夫婦とはしょせんこんなもの」という諦め・機能的コミットメントは女性が高かった。これは中年期が多数を占めた伊藤・相良（2015）と同様の結果であったが、高齢期の対象者が増えた今回のデータではさらにジェンダー差が増大した。また、子育て期と中高年期を比較した Ito & Sagara（2016）でも、ジェンダー差は同様にみられたが、世代差（ステージ差）が人格的コミットメントではみられず、諦め・機能的コミットメント、規範的コミットメントでみられ、特に規範的コミットメントでは世代差が非常に大きかった。人格的コミットメントはジェンダー差はみられるものの、世代に関わりない個人的要因といえ、一方、規範的コミットメントは世代差が大きく関わる要因といえる。

次に、クラスターごとにその特徴をみてみると、人格的コミットメントが最も高かったのは予想に反して規範型で、規範型と名付けられた理由は、結婚生活の継続や離婚を、道徳や責任・規範など対社会的側面から考える規範的コミットメントが飛び抜けて高いことから付けられたものであった。この型は男女とも年齢が最も高く、性役割観は最も保守的で、愛情が高いにもかかわらず結婚生活において自らを低勢力であると認知していた。高齢期夫婦のコミットメントについて研究は多くないが、結婚生活を幸福に感じているカップルでは、互いの人格に対するコミットメントが高いことが報告されており（Robinson & Blanton, 1993）、規範型において人格的コミットメントが高いことは同様だが、それ以外ではかなり様相を異にしていた。

一方、規範型と好対照をなすのが愛情型で、人格的コミットメントは規範型ほど高くないが規範型に次ぎ、愛情や関係満足度、そして精神的健康も規範型と同様に高かった。しかし、規範型と大きく異なるのは規範的コミットメントが低く、かつ諦め・機能的コミットメントは最も低いことであった。すなわち、この型は配偶者との結婚生活

を機能的な関係として位置づけておらず、性役割観は非保守的で、なによりも配偶者との関係で自らを低勢力、すなわち我慢をしているとは考えていないことであった。

この両型は、高齢期夫婦を関係性の視点からみた宇都宮（2004）の表面的関係性型と関係性達成型（後に人格的關係性型）に通ずるところがある。両型とも、精神的健康の指標であるモラルが高く、結婚満足度も高いことから、結婚生活を肯定的に位置づけていることがわかる。しかし、表面的関係性型では、配偶者を役割遂行度、すなわち機能性の点から評価していることである。これらの点から宇都宮（2004）は、両型は「（結婚）満足度の抛り所が質的に異なる」という。

本研究の規範型は年齢が高く、性役割観も最も保守的で、男性が一家の稼ぎ手で、女性は家庭を守り子どもを育てるといった伝統的な性別分業観を強くもち、それを全うすることが夫婦関係満足度の源泉であった。しかし、一方で、自分は配偶者との関係において「我慢をしている」という思いが低勢力認知につながったと考えられる。これは先の Robinson & Blanton（1993）の高齢期夫婦が、結婚は社会的規範に支配されたものではなく、あくまで配偶者との関係によるものだと考えるのは好対照といえる。結婚や配偶者の存在を役割ではなく人格レベルから意味づけ、配偶者との関係を対等で公平であると考ええる愛情型は、確かに親密性に基づくコミットメントによると考えられるが、自らの結婚生活が世間一般の「結婚のかたち」を満たしていることで結婚生活を肯定的に意味づけることができる規範型も、「結婚生活の満足の源泉が異なる」（宇都宮、2004）とはいえ、結婚の一つのありようといえるだろう。

一方、これら二つの型に対して疎遠型では人格的コミットメントが最も低い。そのため配偶者への愛情も低く、特に女性では愛情も関係満足度も極端に低くなっている。日々の生活で配偶者に我慢を重ねているという低勢力認知は最も高く、そのため精神的健康も低いというものであった。結婚や配偶者の存在を機能的なものとして割り切っているわけではなく、適応上問題を抱えている一群といえよう。

本研究の問題点と今後の課題

本研究では中高年期夫婦の結婚コミットメントから、規範型、愛情型、疎遠型、平均型が抽出されたが、各得点が男女で大きく異なったため標準得点を用いた。そのためどのコミットメントもゼロに近い平均型が抽出され、しかもそれが半数近くに上った。この型については特に言及しなかったが、分析方法を変えることによってまた違った結果が得られることも考えられるため、検討の余地があるだろう。また、夫婦関係に関する研究は文化が異なればそのままでは適用しにくいという (Fincham & Beach, 2006)。人格的コミットメントや愛情の高い規範型が、古い世代の性役割観に基づくものなのか、わが国の夫婦関係に特有にみられるのかは、今後、慎重に検討していかなければならないだろう。さらに、規範型や愛情型の配偶者がどのようなタイプであるか、夫婦の相互性という視点から夫婦ペアでの分析が必要になってくるといえよう。

注

- 1) 調査が年度をまたいで行われたのは高齢期のデータが少ないためで、2013年の調査では中高年期夫婦 927名、2014年の調査ではおもに高齢期の対象者を 651名追加した。
- 2) 対象者が中高年期であるにもかかわらず離死別者が少ないのは、依頼状に「夫婦関係の調査」と記されていたため、配偶者のいない者が該当しないと考えて回答しなかったためと考えられる。
- 3) 全体に学歴が高いのは、中年期においては大学生の親を、高齢期においては大学および自治体主催の公開講座や生涯学習講座等に参加する人々が多く含まれていたためと考えられる。

引用文献

- Adams, J. M., & Jones, W. (1997). The concept -ualization of marital commitment: An integrative analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1177-1196.
- Fincham, F. D., & Beach, S. R. H. (2006). Relationship satisfaction. In Vangelisti, A. L. & Perlman, D. (Eds.)

- The Cambridge handbook of personal relationships. New York: Cambridge University Press. pp.579-594.
- 池田政子・伊藤裕子・相良順子 (2005). 夫婦関係満足度みるジェンダー差の分析——関係は、なぜ維持されるか——, *家族心理学研究* 19, 116-127.
- 稲葉昭英 (2004). 夫婦関係の発達の変化, 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子 (編) *現代家族の構造と変容*, 東京: 東京大学出版会, pp.261-276.
- 伊藤裕子 (2015). 夫婦関係における親密性の様相 *発達心理学研究* 26, 279-287.
- 伊藤裕子・池田政子・相良順子 (2014). 夫婦関係と心理的健康——子育て期から高齢期まで——, 京都: ナカニシヤ出版.
- 伊藤裕子・相良順子 (2012). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——中高年期夫婦を対象に——, *心理学研究* 83, 211-216.
- 伊藤裕子・相良順子 (2015). 結婚コミットメント尺度の作成——中高年期夫婦を対象に——, *心理学研究* 86, 42-48.
- Ito, Y. & Sagara, J. (2016). Marital commitment between couples in child-rearing period and in middle-aged and elderly period. The 31st International Congress of Psychology. (Yokohama, Japan).
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, *心理学研究* 74, 276-281.
- Johnson, M. P., Caughlin, J. P., & Huston, T. L. (1999). The tripartite nature of marital commitment: Personal, moral, and structural reasons to stay married. *Journal of Marriage and the Family*, 61, 160-177.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 夫婦関係 日本児童研究所 (編), *児童心理学の進歩* Vol.42, 東京: 金子書房, pp.85-117.
- 古村健太郎・松井豊 (2013). 親密な関係におけるコミットメントのモデルの概観, *対人社会心理学研究* 13, 59-70.
- 厚生労働省 (2016). 国民生活基礎調査の概況 (平成 27 年)
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/index.html>> (2016 年 8 月 15 日)
- 落合恵美子 (1997). 21世紀家族へ (新版) ——家族の戦後体制の見かた・超えかた——, 東京: 有斐閣選書.

- 岡本祐子・村田朋子（2005）. 中年期夫婦における夫婦関係満足度と妻理解・平等主義的性役割観の関連, 広島大学心理学研究 5, 195-209.
- Robinson, L. C., & Blanton, P.W. (1993). Marital strengths in enduring marriages. *Family Relations*, 42, 38-45.
- 相良順子・伊藤裕子（2010）. 中高年期の夫婦関係における低勢力認知, 日本心理学会第74回大会論文集, 1323.
- Sagara, J., Ito, Y., & Ikeda, M. (2006). Gender-role attitude and psychological well-being of middle-aged men: Focusing on employment patterns of their wives. *Japanese Psychological Research*, 48, 17-26.
- Saginak, K. A., & Saginak, M. A. (2005). Balancing work and family: Equity, gender, and marital satisfaction. *Family Journal*, 13, 162-166.
- 宇都宮博（1999）. 夫婦関係の生涯発達——成人期を配偶者とともに生きる意味—— 岡本祐子（編）. 女性の生涯発達とアイデンティティ, 京都：北大路書房, pp.179-208.
- 宇都宮博（2004）. 高齢期の夫婦関係に関する発達心理学的研究, 風間書房.
- 宇都宮博（2005）. 結婚生活の質が中高年者のアイデンティティに及ぼす影響——夫婦間のズレと相互性に着目して——, 家族心理学研究 19, 47-58.

（2016. 8. 29 受稿, 2016. 10. 3 受理）